

て」の実状が大きく異なるので、全国一律の政策は有効ではなく、地域の実状、個人のニーズにあわせたきめの細かい政策が必要だと思われる。また、第何子の出産であるのかによってもその選択を決める要因は異なるので、それにあわせた対策が求められるだろう。

現在は働く母親の育児支援に目が向けられているが、都市部のような孤立した子育ての在り方は、専業主婦層の女性達にも育児コストは大きすぎると感じられている。財政的な制約など課題は多いと思われるが、安心して利用できる育児サービスを地域で展開していくことが必要だろう。しかし、日本の企業社会の在り方が変わらない限り、男性の家事参加・育児参加は難しく、女性が仕事と子育てのどちらかを選ばざるをえない状況が続くことを指摘しておきたい。子育ては決して女性だけが担うものではない。企業システムも含めて、総合的に「ジェンダーシステム」から日本社会が脱皮することが強く求められている。

このような一つ一つの積み重ねが、厚生省が平成 10 年版の『厚生白書』に掲げた「子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会をー」の実現につながるのではないだろうか。

しかしながら、これらの知見は、男性の育児参加の促進や、専業主婦層も利用できる子育て支援政策を整備する必要性を示すと同時に、これらの政策的対応によって出生率の上昇が見込める部分と、見込めない部分がある可能性も示唆している。今後も「伝統的家族観」の衰退が進み、「個人の生活を重視する価値観」が強まるにも関わらず、現在の「ジェンダーシステム」が維持されるのであれば、未婚者層の「晩婚化」だけではなく、新たに既婚者層の出生数の減少（＝有配偶出生率の低下）が少子化の要因となる可能性が示されている。

注

- 1) 筆者によって指摘されているように、ヴィネット調査は、調査時点では存在されていない要因（たとえば政策）の効果を検討できる、要因間の相関関係のある程度コントロールすることが可能になるなどの利点はあるものの、出産する可能性を持つ人の意志決定を扱っているわけではないため、実際の出産意志そのものとみなすことはできない（織田、1994）。また、客観的要因以外の「価値観」をモデルに含めることができないという制約もある。なお、調査対象者が 18 歳～ 40 歳の女性に限定されているため性別による違いがあるのか否か、は検討されていない。
- 2) この他に、夫婦の育児分担状況に関する変数を分析に含めたモデルも検討したが、有意な効果は男女共に見られなかった。選択肢は「すべて妻が行う」、「主に妻が行うが、夫も頼まれると育児を手伝う」、「主に妻が行うが、夫も自ら進んで育児を手伝う」、「夫も妻も同じ程度育児を行う」、「主に夫が行うが、妻も自ら進んで育児を行う」、「主に夫が行うが、妻も頼まれると育児を手伝う」、「すべて夫が行う」の 7 段階であるが、「夫も妻も同じ程度育児を行う」～「すべて夫が行う」をあわせても全体で 5 %未満であり、どの家庭でも妻が育児の大半を担っている割合が極めて高く、もともとの分散が小さいために有意な差が見られなかったと推測される。実際、グループインタビューにおいても、育児の大部分を妻がおこなっている現状が浮き彫りになっている。

参考文献

- 阿藤誠.1996.「先進諸国の出生率の動向と家族政策」阿藤誠編『先進諸国の人口問題－少
子化と家族政策』：11-48頁.東京大学出版会.
- 江原由美子.1999.「ジェンダー意識の変容」阿藤誠編『平成9年度厚生科学研究費（指定
研究）報告書 家族政策および労働政策が出生率および人口に及ぼす影響に関する研
究』：161-177頁.
- 岩間暁子.1999.「「出産の意志決定」に見られるジェンダー構造」阿藤誠編『平成9年度
厚生科学研究費（指定研究）報告書家族政策および労働政策が出生率および人口に及
ぼす影響に関する研究』：178-184頁.
- 国立社会保障・人口問題研究所.1998.『平成9年第11回出生動向基本調査（結婚と出産
に関する全国調査）－第I報告書－日本人の結婚と出産』.国立社会保障・人口問題
研究所.
- 厚生省.1998.『厚生白書（平成10年版）少子社会を考える－子どもを産み育てることに
「夢」を持てる社会を－』.ぎょうせい.
- 厚生省人口問題研究所編.1996.『現代日本の家族に関する意識と実態－第1回全国家庭動
向調査（1993年）』.(財)厚生統計協会.
- 織田輝哉.1994.「出生行動と社会政策（2）－ヴィネット調査による出生行動の分析－」
社会保障研究所編『現代家族と社会保障－結婚・出生・育児』：151-180頁.東京大学出版
会.
- 生命保険文化センター.1995.『夫婦の生活意識に関する調査－夫婦の相互理解を求めて－』.
生命保険文化センター.

5. 女性の結婚意欲と出産意欲 —ジェンダー意識とジェンダー関係との関連性の分析—

釜野 さおり

I. はじめに

出生力の決定要因には、技術的要因、経済的要因、そして文化的要因があると言われて¹いる。阿藤は、現在わが国が直面している少子化現象を理解するためには、文化的要因、特に価値観を考慮する必要性を強調し、わが国の少子化と深く関連のあるシングル化と晩婚化の急進展は、親子関係、夫婦の役割関係、男女の地位に関する価値観や性・結婚・離婚に対する価値観などの変化と、相互の関連があることを示している。個人レベルのデータの分析でも、男女のつきあい方、結婚に関する考え、夫婦役割観、男女の役割観などの男女観や家族観が、平均初婚年齢に強く関与していることが明らかにされている²。本報告では、これらの研究と同様に、結婚行動や出産行動を理解するには、価値観を考慮することが不可欠であるという前提に立ち、少子化現象をジェンダーの視点から分析するプロジェクトの一環として、女性のジェンダー意識ならびに女性が捉えた夫婦関係（ジェンダー関係）の現状が出産意欲に与える影響を分析する。未婚女性については、出産意欲と深く関連のある結婚に対する意欲の分析も行う。

II. 本報告における「ジェンダー意識」の定義

一般には、男女のありかたや私のおよび公的領域における男女の役割に対する個々人の意識を総して「ジェンダー意識」と言っているが³、「結婚観」「子ども観」「個人主義志向」などもジェンダーとは切り離せないものである。例えば「結婚観」の一面である「結婚の必然性」は、女性ひとりの収入で生活していけるかどうか、シングル女性に対する社会の風当たりがどのくらい強いのか、ジェンダー・システムの頂点とも言える強制的異性愛制度がどの程度内面化されているかなどの現れであり⁴、これらはまさに社会におけるジェンダーのあり方を表象していると言える。同様に、精神的安定、社会的信用、あるいは経済的安定が得られるなどの結婚のメリットや「自由を失う」「仕事が続けられなくなる」「家事

¹ 阿藤誠、「日本の超少産化現象と価値観変動仮説」,『人口問題研究』第53巻第1号,1997年3月,3~20頁.

² 金子隆一,「わが国女子コウホート晩婚化の要因について—平均初婚年齢の過程・要因分解—」,『人口問題研究』第51巻第2号,1995年7月,20~23頁.

³ Khor, Diana. "Incorporation of Women into Public Sphere: Antecedents and Consequences," Ph.D. Dissertation, Stanford University, 1994.

⁴ Kamano, Saori, "Same-Sex Sexual/Intimate Relationships: A Cross-National Analysis of the Interlinkages among Naming, the Gender System, and Gay and Lesbian Resistance Activities," Ph.D. Dissertation, Stanford University, 1995; R. W. Connell, *Gender and Power: Society, The Person and Sexual Politics*, Stanford University Press, Stanford, CA 1997.

育児の負担が増える」などのデメリットを個人がどう考えるかについても、結婚生活のジェンダー関係をどう捉えているかの現れであると解釈できる。

「結婚したら子どもを持つべき」という意識は、望ましい家族の形態をどう考えるかに加え、「女だったら、子どもを産むべき」／「子どもを産んでこそ女である」という主流のジェンダー・イデオロギーの影響、つまり、ジェンダー意識の一面を持つと言える。「子ども観」についても、例えば「子どもには惜しみなく尽くしたい」という気持ちは、「子どもの価値」や「親の責任」の問題でもあるが、女性の場合を考えると、「母親であるからには、すべてを犠牲にしてでも、子どもにできる限りのことをするべき」という強制的母性観念や母性のあり方などに深く関わるジェンダー意識であると言える。

さらには、「人に頼らず生きていきたい」に象徴されるような個人主義的志向についても、女性は弱いもので、一人では生きていけない、という考えの一面に関連している、との解釈もできる。

このように、結婚観、子供観、個人主義的志向と言われている次元も、社会のジェンダー・システムのあり方に従属しており、広い意味で「ジェンダー意識」と位置づけることができる。したがって、本報告では、「結婚観」「子供観」などの用語を使う部分もあるが、大局的には、これらの次元もジェンダー意識として捉えて分析する。

III. ジェンダー意識・ジェンダー関係と結婚意欲・出産意欲の関係

本報告でのジェンダー意識の捉え方は上に述べたとおりだが、では、それが結婚意欲や出産意欲とどう関連していると考えられるだろうか。また、本報告のもう一つの焦点であるジェンダー関係は、どうであろうか。本報告で分析に使う指標との関連に絞って述べていく。

まずジェンダー意識については、「伝統的な」ジェンダー意識を持つ女性の方が出産意欲が高い、と考えられる。具体的には、結婚を高く評価する、結婚の必然性を支持する、結婚したら子供を持つことを必然と考える、子供を持つことができることを結婚のメリットと考える、育児や家事負担が増えることを結婚の欠点であるとは考えない、性役割分業を支持する、という女性は、自分自身もその考えに矛盾しない生き方をしようとする可能性が高いので、伝統的でないジェンダー意識を持つ女性よりも、結婚意欲や出産に対して積極的であることが予想できる。また、一面では性役割分業を内面化しているとも言える「家事や育児が好きである」との意識も、結婚や出産への意欲と正の関連を持つことが予想される。

次に、子供に対する意識に現れるジェンダー観は出産意欲とどう関わっていると考えられるだろうか。一方では、母性意識が強いことの象徴である「子供は生きがいである」「子供にはすべてをかけたがたい」、という意識が高いほど、「母性」を内面化しているので、出産への意欲が強い、という関連性、もう一方では、子供を重視する気持ちが強いがために逆に出産を躊躇するので、出産への意欲が弱い、という可能性が考えられる。

では、個人主義的かどうか、はどうであろうか。「ここでは「人に頼らずに生きていきたい」という意識の影響を見るが、この考えは、女性でもひとりで生きていける、という自立意識と共通していると思われるので、結婚や出産への意欲とは負の関連を持つと考えられる。

出産や結婚への意欲を考える時、ジェンダー意識の他に、実際のジェンダー関係のあり方も重要である。ジェンダー関係と出産意欲はどのように関係しているだろうか。ジェンダー関係は、家族、職場、学校、地域、電車の中など、ありとあらゆる状況においての女性と男性のおかれた立場やその関係などで語ることができるが、本報告では、実際に結婚している女性の夫妻関係の現状にみるジェンダー関係の分析に絞る。夫妻関係の中で、最も明らかに出産意欲に影響すると考えられるのは、夫の家事や育児への参加であろう。また、夫の育児や家事への関わり方をはじめとして、母親に対する周囲の期待、内面化した母親像、周囲からのサポートの状況など、夫妻間ならびに夫妻をとりまくジェンダー関係に関与しているだろう「女性の育児負担感や家事・育児への不満感」も、出産意欲に関わっていると考えられる。家事や育児をしない夫を持つ妻ほど、また、育児負担や不満を感じる人ほど、出産を望まない、という関連が予想される。以下、ここで予想したような関連が見られるかどうかをデータを使って検討する。

IV. 分析データ

本報告で検討する分析には、層化2段無作為抽出によって抽出された全国の市区町村に居住する20から44歳の女性3000人を対象に行った「女性の生活意識に関する調査」のデータを使用する。この調査は、1991年12月に生命保険文化センターによって実施され、回収数は2362（回収率78.7%）である。なお、分析には40歳未満のデータのみを使用する。

V. 本報告における出産意欲、結婚意欲、ジェンダー意識、ジェンダー関係の指標

A. ジェンダー意識

1. 性役割観（値が小さい方が 伝統的／女性は家事育児を支持）
「女性は結婚したら、家事・育児に専念すべきである」
（1＝まったくそう思う；2＝まあそう思う；3＝あまりそうは思わない；
4＝まったくそうは思わない）
2. 家庭的志向（家事育児好む）（値が小さい方が、家事育児を好む）
Aの考え方「外で働くより、家事や育児の方が好きだ」
Bの考え方「家事や育児のより、外で働く方が好きだ」
（1＝Aに近い；2＝どちらかと言えばAに近い；3＝どちらかと言えばBに近い；
4＝Bに近い）
3. 「結婚観」
 - a. 結婚の必然性（値が小さいほうが、結婚の必然性弱い）
「経済的に自立していれば、あえて結婚する必要ない」
（1＝まったくそう思う；2＝まあそう思う；3＝あまりそうは思わない；
4＝まったくそうは思わない）

b. 家事と育児にかかわる結婚のメリットとデメリット

i. 子供メリット：結婚のメリットの質問で「子どもを生み、育てることができる」を選んだか

ii. 育児デメリット：結婚デメリットの質問で「育児などの仕事が増える」を選んだか

iii. 家事デメリット：結婚デメリットの質問で「家事などの仕事が増える」を選んだか
(0 = ○なし； 1 = ○あり)

c. 子供の必然性

「結婚したからと言って、あえて子どもを産む必要はない」

(1 = まったくそう思う； 2 = まあそう思う； 3 = あまりそうは思わない；
4 = まったくそうは思わない)

4. (母) 親のありかた

a. 「子どもには全てを」主義

(値が小さい方が、「子どもには全てを」という気持ちが強い)

下記の5項目を足しあわせ、尺度を作った。(尺度の信頼係数クロンバック $\alpha = 0.67$)

Q10_20 「子供には、自分の夢を託したい」

Q10_21 「子供には苦勞させたくない」

Q10_22 「子供は、できれば有名校・一流校に進ませたい」

Q10_23 「子供には、おしゃれをさせてやりたい」

Q10_24 「子供の教育についてはお金を惜しみたくない」

(1 = まったくそう思う； 2 = まあそう思う； 3 = あまりそうは思わない；
4 = まったくそうは思わない)

b. 子どもは生きがい <既婚者の分析の時のみに使う>

「それでは、その中で最も喜びや生きがいを感じていることはどれでしょうか」の質問で「子どもの成長」を選んだか。(0 = ○なし； 1 = ○あり)

5. 個別的志向 (値が小さい方が、より「個別的」)

「人に頼らず生きていきたい」

(1 = まったくそう思う； 2 = まあそう思う； 3 = あまりそうは思わない；
4 = まったくそうは思わない)

B. ジェンダー関係

1. 家事育児への不満感 (既婚者のみ)

「あなたは現在の生活において、次の中のどのような点に不満を感じていますか。」

の質問で、「家事や育児にかかわる不満」を選んだかどうか。

(11項目中3つまで選択可能)(0=○なし; 1=○あり)

2. 夫の家事・育児参加度

a. 夫の家事参加度 (既婚者のみ) (値が小さい方が、夫の参加が多い)

「ところで、ご主人は家事に参加していますか」

(1=自分よりも夫の方が家事を担っている; 2=夫も自分と同程度の家事を担っている; 3=自分が中心はあるが、夫も自ら進んで家事に参加している; 4=自分が中心ではあるが、夫も頼んだ時には参加している; 5=夫はほとんど家事に参加していない; 6=夫はまったく家事に参加していない)

b. 夫の育児参加度 (既婚で子供のいる人のみ) (値が小さい方が、夫の参加が多い)

「ところで、末のお子様は乳幼児(0~3歳)の時、ご主人は育児に参加しましたか(していますか。)」

(1=自分よりも夫の方が担った; 2=夫も自分と同程度の育児を担った; 3=自分が中心ではあるが、夫も自ら進んで育児に参加した; 4=自分が中心ではあるが、夫も頼んだ時には育児に参加した; 5=夫はほとんど育児には参加しなかった; 6=夫はまったく育児には参加しなかった)

C. 結婚意欲

1. 結婚意欲: 結婚したいかどうか (値が小さい方が、結婚意欲が強い)

「あなたの結婚に対するお考えを次の中からお選びください。」

(1=できればすぐにでも結婚したい; 2=いずれは結婚したい;
3=なるべく結婚したい; 4=このまま一生結婚したくない)

D. 出産意欲

1. 出産意欲: ほしい子どもの数 <未婚者のみ>

「あなたは、子供を少なくとも何人は欲しいとお考えでしょうか。」

(1=子供はいなくてもかまわない; 2=少なくとも1人は欲しい;
3=少なくとも2人は欲しい; 4=少なくとも3人以上は欲しい)

2. (追加) 出産意欲: 現在の数より多く子供が欲しいかどうか <既婚者のみ>

「あなたは、子供を少なくとも何人は欲しいとお考えでしょうか。現在のお子様の人数に関係なくお答えください。」

(1=子供はいなくてもかまわない; 2=少なくとも1人は欲しい;
3=少なくとも2人は欲しい; 4=少なくとも3人以上は欲しい)

この質問への回答(ほしい子どもの数)と現在の子どもの数から(追加)出生意欲を測る。

・現在子どもがいない人: 欲しい子どもの数(0、1、2、3人以上)を指標とする。

すでに子どものいるひとについては、追加出産への意欲を使う。

・現在子どもが一人の人：「少なくとも2人以上」「少なくとも3人以上」= 1

・現在子どもが二人の人：「少なくとも3人以上」= 1

E. 属性

年齢（生年）

最終卒業学校（1 = 中学校；2 = 高校；3 = 短期大学・高専；4 = 大学・大学院）

収入（8分類）

就労状況（自営業・自由業、パート・アルバイト等も含め現在就労しているか）

V. 分析と結果

上記で述べた指標を用いて、ジェンダー意識とジェンダー関係が、女性の出産意欲および未婚女性の結婚意欲に与える影響を重回帰分析を使って分析する。出産意欲は、現在の子供の数によって規定要因が違っていると考えられるので、既婚女性を現在の子供の数によってグルーピングし、各グループ毎に、（追加）出産を望むかどうかを被説明変数とし、ジェンダー意識とジェンダー関係の変数を説明変数、属性をコントロール変数として、重回帰式またはロジスティック回帰式に挿入し、それぞれの説明変数の効果を検討する。

表1に「現在の子供の数」と「欲しい子供の数」の%分布を示した。

（1）未婚女性の結婚意欲の分析

まず、未婚女性の結婚への意欲についての分析を行う。結婚への意欲を説明変数、「ジェンター役割」「家庭的志向」「結婚の必然性」「子供メリット」「育児デメリット」「家事デメリット」「子供の必然性」「子供すべて主義」の8変数を説明変数、年齢をコントロール変数として、重回帰分析を行った。その結果が表2に示されている。

この分析では、「家庭的志向」「結婚の必然性」「子供メリット」「子供すべて主義」「年齢」が、統計的に有意な効果を示した。つまり、「子どもには全てを」という考えが強いほど、結婚に必然性を感じるほど、家事・育児の方が仕事より好きであるほど、暮らしを変えていきたい、という気持ち強いほど、子どもを産み、育てることができることを結婚のメリットと考える人ほど、結婚意欲が高い、という結果が得られた。また、年齢が高くなると、結婚に対する意欲が低くなることもわかった。

なお、年齢の他に、学歴や収入を入れて同様の分析を行ったが、統計的に有意な効果が現れず、他の変数の効果も変わらなかったため、ここでは省略する。

（2）未婚女性の出産意欲の分析

未婚女性の出産への意欲についての分析では、＜欲しい子どもの数＞（0、1、2、3以上）を被説明変数とし、「ジェンター役割」「家庭的志向」「結婚の必然性」「子供メリット」「育児デメリット」「家事デメリット」「子供の必然性」「子供すべて主義」の8変数を説明変数、年齢をコントロール変数として、重回帰分析を行った。その結果が表3に示されている。

この分析結果から、次のことが読み取ることができる。子供の必然性を感じる、子供を産み育てることを結婚のメリットと考える、家事が増えることをデメリットと考えないほど、欲しい子供の数が多くなっている。また、未婚であっても、年齢の低い人のほうが、欲しい子どもの数が多い。他の変数には統計的有意な効果はなかった。また、学歴や収入を考慮した分析を行っても、それらは効果を示さず、他の変数の効果にも変化を及ぼさなかった。

(3) 既婚で子どものいない人の出産意欲の分析

次に、既婚で現在子供のいない人の欲しい子供の数についての分析を行う。〈欲しい子供の数〉(0、1、2、または3以上)を被説明変数とし、「ジェンター役割」「家庭的志向」「子供メリット」「育児デメリット」「家事デメリット」「子供の必然性」「子供すべて主義」の意識変数と「夫の家事参加」「家事育児の不満」のジェンダー関係の変数、計9変数を説明変数、年齢と就労形態をコントロール変数として、重回帰分析を行った。その結果が表4に示されている。

「こどもの必然性」「子供すべて主義」「子供メリット」「夫の家事参加」「家事育児への不満」および年齢が統計的有意な効果を示した。この結果は、子供を持つべき、との考えが強く、子供を産み育てることをメリットと考え、しかし、子供にはすべてを与えたいとは考えない人ほど出産意欲が高く、また、夫が家事に参加しない程、家事・育児に不満を感じているほど、欲しい子供の数が少なくなっていることを示している。また、年齢が若いほど、出産意欲が高くなっている。しかし、就労しているかどうかは関与していないことがわかった。

(4) 既婚で子どもが一人の人の追加出産意欲の分析 (さらに子供が欲しいかどうか)

それでは、子どもがすでに一人いる女性の場合はどうであろうか。ここでは、欲しい子供の数の質問で、現在の子供数より多い人数を答えた人を追加出産意欲があり、そうでない人を追加出産の意欲がない、と見なして分析する。追加出産意欲を被説明変数とし、「ジェンター役割」「家庭的志向」「子供メリット」「育児デメリット」「家事デメリット」「子供の必然性」「子供すべて主義」の意識変数と「夫の家事参加」「夫の育児参加」「家事育児の不満」のジェンダー関係の変数の計11変数を説明変数、年齢と就労形態をコントロール変数として、ロジスティック回帰分析を行った。その結果が表5に示されている。この結果は、子供が一人の人がさらに子供を欲しいと希望するのは、子供にはすべてを与えるべき、とは考えず、子供の成長に生きがいを感じ、子どもを育てることをメリットと感じている人、さらに、一人目の子どもが3歳以下の時に夫が育児に参加した度合いが高い人である、ということを示している。

(5) 既婚で子どもが二人の出産意欲の分析 (さらに子供が欲しいかどうか)

さて、すでに子どもを2人持っていて、さらに子供が欲しいと考える女性は、どのようなジェンダー意識をもち、どのようなジェンダー関係にあるのだろうか。ここでは、欲しいこどもの数が3以上の人を、「追加出産意欲がある」とする。追加出産意欲の有無を被説明変数、「ジェンター役割」「家庭的志向」「子供メリット」「育児デメリット」「家

事デメリット」「子供の必然性」「子供すべて主義」の意識変数と「夫の家事参加」「夫の育児参加」「家事育児の不満」のジェンダー関係の変数の計11変数を説明変数、年齢と就労形態をコントロール変数として、ロジスティック回帰分析を行った。その結果が表6に示されている。

この結果は、子供が二人いて、さらに子供を欲しいと希望するのは、子供の必然性を支持している人、希望しないのは、結婚のデメリットとして育児などの仕事が増えることを挙げる人である、ということを示している。しかし、モデル全体としては統計的に有意でないので、ここで考慮した要因では第3子以降の追加出生意欲はよく説明されず、ここでとりあげた特徴以外の事柄が関与していると考えられる。子どもをすでに2人持つ女性の場合は、ジェンダー意識やジェンダー関係では説明できない個人差などが、追加出産意欲の要因になっている可能性もあるようだ。

VI. 結果のまとめ

上記の分析から、結婚意欲ならびに出産意欲について次のことが言える。未婚女性については、「経済的に自立していれば結婚する必要ない」という非伝統的なジェンダー意識を持つことが、結婚への意欲を下げている。また、未婚であっても、子どもを産み育てることを結婚のメリットと考える、と言った形で、子供を育てることに興味を持ち、且つそれが結婚の中で行なわれることだ、と考える未婚の女性は、結婚への意欲も高くなっている。さらに「子供にはすべてを与えたい」と感じ、「家事や育児が好きだ」と認識している人は結婚への意欲が強い。つまり、子供、結婚、家事・育児を肯定的に捉えている人は、結婚への意欲も高いということである。

次に、出産意欲についての分析結果を総合すると、結婚と子どもに対する考えに影響されていることがわかった。「子供を産み育てること」が結婚のメリットと考えることは、子どもがいない、または子どもを一人持つ人の出産の意欲を高めている。また、子供がいないか一人の場合は、「子どもにはすべてを与えるべき」という風に考えない人の方が、出産意欲が高くなっている。この結果から、子供にはできるだけお金やエネルギーを注ぎたい、と思うがために、様々なプレッシャーを感じ、「子どもが欲しい」という意欲を下げている可能性が考えられる。実際の子育ての経験がポジティブであることを表す「子供の成長に生きがいを感じていること」は、子供が一人の場合のみ、出産の意欲を高めている。規範的なレベルで、「結婚したら子供は持つべきだ」と考えることは、子供が二人いる女性でのみ、出産意欲を高めている。

夫妻関係のあり方にみるジェンダー関係も、現在の子どもの数によって表われ方は違うが、出産意欲に大きく影響していることがわかった。子供がいない人は、家事をやらない夫を持ち、家事・育児に不満を感じているほど、欲しい子供の数が少なくなっている。子供が一人の場合、夫が育児に参加した度合いが低い人ほど、さらに子どもが欲しい、という気持ちを抑制している。子供が二人いる女性の場合、育児などの仕事が増えることを結婚のデメリットである、としてあげる人ほど、3人目以上を望まない傾向にある。また、未婚女性でも、結婚すると家事が増える、と思うことが出産への意欲を低めている。これは間接的なジェンダー関係の観察などによっておこる意識であると考えられる。つまり夫のあり方が、女性の出産意欲の鍵を握っている、と言えよう。

年齢の効果は、既婚で子供がいない女性の場合のみで認められ、若い人ほど出産意欲が高くなっている。しかし、就労しているかどうかは、現在の子供の数に関わらず、出産意欲には関与していない、という知見も得られた。

VII. 結論および今後の研究の展望

ここでは、広義にとらえたジェンダー意識と結婚の中のジェンダー関係が、女性の結婚および出産意欲に与える影響を分析した。結婚へ意欲は、結婚する必要がない、という意識を持っている人に低く、出産への意欲は、子どもを産んで育てることができることを、結婚するメリットであるとは考えない人に低くなっている、という結果が得られた。しかし、だからと言って、結婚や出産を促進するために、女性の経済的な自立を妨げ、「結婚はするべきだ、結婚したら子どもを持つべきだ」と言った、半強制的に結婚や出産をさせる規範を強化し、旧来のように、女性に本質的な選択肢を与えないまま結婚や出産をさせればよい、という論は成り立たない。結婚や出産が選択肢の一つになり、強制されるものでなくなりつつあることは、生活の質という面からも、ジェンダー規範の緩和の面からも肯定的に捉えるべきである。

では、このような現状で、晩婚化・非婚化、少子化にどう向かえばよいのだろうか。本報告で行った分析で得られた知見からは、少なくとも2つのことが言える。まず第一に、子どもには「全て」を与えなければならない、という強迫観念を持っていない人の方が出産意欲がある、という結果から、例えば、気楽に子育てをしても子どもが育っていくような社会、つまり、親だけが責任を感じて「子どもには苦勞させたくない」「有名校・一流校に進ませたい」「教育にはお金を惜しみたくない」と追い込まれてしまうような社会でなく、どんな背景を持つ人間も生きやすいような社会をつくり、社会全体で子どもを育てて行くような環境をつくるのが、平成10年度の厚生白書のスローガンでもある「子どもを産み育てることに「夢」を持てること」につながるのではないだろうか⁵。

第二には、分析結果から、男性の家事・育児への参加が、女性の出産意欲を高めることにつながる事が明らかになった。これについては、すでにマスコミなどでも言われているように、男性の家事や育児への参加を促進するための意識の改革、それを可能にするような労働環境を創っていくことが、少なくとも「子どもを育てることには興味があるが、結果的には自分一人が育児をすることに疑問を感じている女性」については、産みたいという気持ちを促進させ、行動に移すことを可能にするのではないかと考えられる。

本報告では、比較的単純なデータ分析に基づいているが、今後、他の質問項目なども使用して、さらに細かい分析を行い、新たな知見を得ることも可能である。また今後の研究では「なぜ結婚しないのか、なぜ産まないのか」と問う前に、逆に、なぜ今までしていたのか、という視点から現在のジェンダー関係を捉え、それを踏まえた上で、「ある程度」選択肢として結婚や出産が行なわれつつある今の状況を理解し、これからの結婚や子育てのあり方を考えていくことも大事であろう。

⁵厚生省、平成10年度厚生白書：少子社会を考える－子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会に。

表1: 現在の子供の数と欲しい子供の数(%)

現在の子どもの数		欲しい子どもの数				合計
		いなくても かまわない	少なくとも 1人は欲しい	少なくとも 2人は欲しい	少なくとも 3人は欲しい	
未婚	N=399	11.5	21.6	62.7	4.3	
既婚、子どもなし	N=123	13.8	27.6	52.8	5.7	99.9
既婚、子ども1人	N=283	2.5	21.6	68.2	7.8	100.1
既婚、子ども2人	N=604	1.6	4	79.1	15.2	99.9

表2: 未婚女性の結婚意欲: 重回帰分析の結果 (被説明変数: どの程度結婚したいか)

説明変数	非標準化係数	標準誤差
子供にはすべてを	0.175 ***	0.048
結婚の必然性	-0.151 ***	0.035
性役割観	0.00136	0.033
子供の必然性	-0.0571	0.038
家事育児好む	0.063 **	0.028
個別志向	-0.0310	0.035
育児デメリット	-0.0494	0.051
子供メリット	-0.0963 *	0.051
家事デメリット	0.0288	0.049
年齢	-0.016	0.006
(定数)	2.45 ***	0.238
調整済みR ² =.196		
N=374		

*: p < 0.05; **: p < 0.01; ***: p < 0.001

表3: 未婚女性の出産意欲: 重回帰分析の結果 (被説明変数=欲しい子どもの数)

説明変数	非標準化係数	標準誤差
子どもには全てを	0.0283	0.068
結婚の必然性	0.0189	0.049
性役割観	-0.0036	0.045
子どもの必然性	0.321 ***	0.052
家事育児好む	-0.0498	0.039
個別志向	0.056	0.049
育児デメリット	0.06	0.046
子どもメリット	0.323 ***	0.07
家事デメリット	-0.106	0.07
年齢	-0.0234 ***	0.068
(定数)	1.908	0.045
調整済みR ² =.319		
N=374		

*: p < 0.05; **: p < 0.01; ***: p < 0.001

表4: 現在子どもがいない既婚女性の追加出産意欲: 重回帰分析の結果
(被説明変数=欲しい子どもの数)

説明変数	非標準化係数	標準誤差
子どもには全てを	0.26 *	0.115
子どもの必然性	0.246 ***	0.075
家事育児好み	0.0047	0.071
育児デメリット	-0.0169	0.217
子どもメリット	0.737 ***	0.134
家事デメリット	-0.0785	0.119
夫の家事参加	-0.108 *	0.052
家事育児不満	-0.543 *	0.283
性役割観	0.0111	0.084
就労の有無	-0.165	0.014
年齢	-0.0427 ***	0.126
(定数)	2.566	0.639
調整済みR ² =.456		
N=122		

*: p < 0.05; **: p < 0.01; ***: p < 0.001

表5: 現在子どもを一人持つ既婚女性の追加出産意欲: ロジスティック回帰分析の結果
(被説明変数=二人以上欲しいかどうか) (1=欲しい子どもの数二人以上)

説明変数	非標準化係数	標準誤差	Exp(B)
子どもには全てを	0.664 *	0.319	1.94
子どもは生きがい	0.726 *	0.312	2.07
子どもの必然性	0.358	0.198	1.43
性役割観	-0.0650	0.207	0.937
家事育児好み	0.0249	0.189	1.02
育児デメリット	0.0664	0.333	1.07
子どもメリット	1.02 ***	0.327	2.77
家事デメリット	-0.376	0.334	0.686
夫の家事参加	0.312	0.206	1.37
夫の育児参加	-0.553 *	0.241	0.575
家事育児不満	0.453	0.406	1.57
就労の有無	0.267	0.339	1.36
年齢	-0.0634	0.0365	0.939
(定数)	0.135	1.85	
N=282			
2xlog likelihood= 267.7			
Goodness of Fit= 293.7			
Model χ^2 = 46.1***			

表6: 現在子どもを二人持つ既婚女性の追加出産意欲: ロジスティック回帰分析の結果
 (被説明変数=三人以上欲しいかどうか) (1=欲しい子どもの数三人以上)

説明変数	非標準化係数	標準誤差	Exp(B)
子どもには全てを	0.203 *	0.25	1.22
子どもは生きがい	0.0145 *	0.241	1.01
子どもの必然性	0.502	0.159	1.65
性役割観	-0.1330	0.165	0.875
家事育児好み	0.115	0.141	1.12
育児デメリット	-0.625	0.2788	0.535
子どもメリット	-0.13 ***	0.271	0.878
家事デメリット	0.48	0.262	1.62
夫の家事参加	-0.049	0.134	0.952
夫の育児参加	-0.066 *	0.162	0.936
家事育児不満	-0.164	0.327	0.849
就労の有無	0.144	0.269	1.16
年齢	-0.042	0.0326	0.959
(定数)	0.135	1.56	
	-1.74		
N=592			
2xlog likelihood= 490.1			
Goodness of Fit= 599.8			
Model χ^2 = 21.4			

6. 結婚コスト感、価値観・意識と結婚回避の関連性 —独身男女のインタビュー調査にもとづいて—

釜野 さおり

I. はじめに

本報告の目的は、これまで本プロジェクトのジェンダー小委員会が築き上げてきた、ジェンダーの視点から少子化現象を分析する枠組みの中の結婚回避に関わる部分に焦点をあて、独身男女の価値観・意識と結婚コスト感か結婚回避に結びつくメカニズムを、事例研究を通して明確にさせることである。

既知のとおり、日本の少子化現象は、晩婚化・非婚化を抜きにして語るができない。少なくともごく最近まで、出生率の低下は、結婚している人が子どもを持たなくなったのではなく、そもそも結婚する人が減っていることに要因があると分析されている。したがって、少子化現象の分析では、結婚していない、あるいは結婚しないという現象を理解することが不可欠である。ジェンダー小委員会が昨年度行った量的データ（「女性の生活意識に関する調査」生命保険文化センター）の分析では、「経済的に自立していれば結婚する必要がない」と考える独身女性は結婚意欲が低いこと、子どもを産み育てることに興味を持ち、且つそれが結婚の中で行われることである、と考える女性は、結婚への意欲が高いことが統計的に確認された。しかし、量的データで扱われるジェンダーに関わる要素は限られている上、量的分析だけでは、実際に独身の男女がどのような経験をもとに意識を持つようになるのか、そして、どのような考え方が結婚回避に関連しているかのメカニズムを理解することは困難である。そこで、我々は平成10年度の研究プロジェクトとして、独身男女を対象にグループインタビュー調査を行い、結婚、子ども、家族、生きかた、男女関係などについて、2名のファシリテーターのもとで語ってもらった。本報告では、インタビュー調査に基づき、ジェンダー関係に焦点を当てて、結婚回避に関わる部分を整理する。

II. 研究方法

ここで分析する独身者のグループは次の4つである。

首都圏 20代男性（5名）（本文におけるインタビューの引用では、男性と記す。）

首都圏 20代女性（6名）（引用には、年齢のみ記す。）

首都圏 30代女性（5名）（引用には、年齢のみ記す。）

山形県鶴岡市 20代女性（5名）（引用には、鶴岡、および年齢を記す。）

インタビュー参加者は、小委員会メンバーの知人・友人を通じて募った。鶴岡市インタビューの参加者については、鶴岡市教育委員会・社会教育課に依頼した。各グループの参加者の特徴をいくつか挙げると、20代男性は、同大学の同級生で年齢が27歳または28歳で、5人中2人がフルタイムで就労している、20代女性は、25歳が3人、27歳が3人、3人がフルタイム就労で、あとの3人はアルバイトをしており、一人暮らしの1名以外は家族と同居している。30代女性は、5人とも民間企業でフルタイム就労、労働時間は50-70時間、1名は両親と同居しているが、4人は一人暮らしである。鶴岡の20代グループは年齢が22歳から27歳で全員が家族と同居しており、一人は無職、1人はパートタイム

就労、3人はフルタイム就労で労働時間は30-40時間となっている。

結婚の予定や交際しているかどうかについては、鶴岡グループの1人は婚約者がおり、3人は恋人がいる。首都圏20代女性グループは、6人中1人に婚約者がおり、恋人として交際している人がある人は、なしだった。30代のグループでは、全員が交際している異性がないと回答した。男性の方は、婚約者がいる人1人、恋人がいる人1人、あとの3人は交際している異性がない、と回答している。

このように、参加者の特徴は、就労、居住形態、結婚の予定などの面で、グループ間でもかなりの違いがあるので、直接比較することは不可能である。また事例研究という方法上、代表性に欠けるため、このインタビューの結果を一般化することはできない。しかし、それぞれの人の声から、価値観・意識と結婚コスト感が結婚回避につながるプロセスを理解する目的には十分適している。

インタビューでは、仕事のこと、結婚に対するイメージ、結婚の利点、独身生活の利点、子どもを持つことのイメージ、子どもを持ちたいかどうか、家族との関係、理想の配偶者像、どんな結婚生活を想像するか、などについて語ってもらった。参加者に年齢や職業、現在の居住形態などの属性的な質問に加え、話し合うテーマについての質問も添付し、書き込んでもらった。そこに書かれた意見なども参考にしながら、小委員会の2名のファシリテーターがテーマを投げかけ、自由にディスカッションする方法をとった。インタビュー時間は90分から110分程度であった。

III. インタビュー調査のまとめ

A. 結婚意欲および今後の希望・見通し

まず、現在独身でいる彼女・彼らは、結婚していないことをどう分析しているのだろうか。また今後結婚する可能性についてはどう考えているのだろうか。

女性は、結婚することは視野にない、という20代グループの一人をのぞき、皆「いずれは結婚したい」と考えている。あるいは、考えるまでもなく、そうすることを前提としている様子であった。また、子どもを産みたいと考える女性は、ある程度の年齢までには、と考えている。今結婚していないのは、特に理由があるのではなく、出会いの機会もないし、なんとなくここまで来てしまったから、というのが主であった。

結婚するつもりがない27歳の女性はこう語る。彼女の場合は、他の人がするのはいいと思うが、自分はしたくない、と思っている。

「…他人と恒久的にずっとその先を一緒にするというイメージが湧かないんですね。結婚した相手とか、子どもを産んだとして、その産んだ子どもの一生に責任を持たない感じがするので、できたら、しないで一生過ごしたいなと思います。」(27歳)

しかし、大半の女性は結婚を希望しており、その思いは、次の32歳の女性の言葉に集約されている。

「もちろん、(結婚)したいと思っています。というのは、同じくらいの年齢で結婚をしていない人とかの話聞いても、やっぱり結婚は、「まあ、したいな」というのは、みんなそうなんだと思うんです。特に、私は一生結婚しない、面倒くさいからとか、そういう人はあまりいないと思うんですね。周りは特にそうですし、一般的にもそうじゃないかなと思うんです。実際やっぱり、これから長い人生を生きていく中、ずっとひとりでやっていくわけにもいかないですし、一緒に何かやるという意味で、誰かいたほうがいいだろうというのは誰でも思ってい

と思うんです。今は、仕事が忙しいというのもあり、なかなか。やっぱり東京とかで働いていると、仕事以外の人と知り合う機会というのはなかなか少ないですし。というような気がするんですけども。」(32歳)

27歳の女性も、あまり深刻に考えている様子ではなかったが、現在結婚していないことと、将来の希望についてこう語る。

「結婚する人は、…運があって、チャンスがあって、あと、勢いがある人がやって、うまくいく人はうまくいくし、いかない人はいかないんだなと。あまり深く考えたことがないので、そうやって聞かれると、かえって考えちゃいますね。」「結婚できていたらいいなと思います。したくないと一度も言ったことはないんですけど、たまたま私でもいいよって言う人、人に今まで会わなかっただけなので。」

また、子どもが欲しいと考えている女性は、出産可能な年齢までには結婚したい、と考えている。

「ずっと一緒にいたいと思う人がいれば結婚すると思うんですけども。あとは、子どもが産める年齢までにはしたいですけども。ぎりぎりまで粘るかなという感じ。」(27歳)

これは、出産意欲が、年齢制限つきでの結婚意欲を強化している一例であろう。逆に子どもは欲しいが、持たないことも考えられる、という33歳の女性は、子どもさえ産まないと決めたら、いくつになってもその時に出てきた人と結婚をすればいい、パートナーを見つかるということに専念すれば、子どもの時期を別に40までに区切る必要はない、と語っている。

30代の女性達は、今結婚していないことについて、気がつくようになってしまった、ここまでなんとなくきてしまった、という面で共通している。

「気がつくようになってしまったというのが正直なところなので。…いい相手がいたら結婚をしたいけれども、そうじゃなかったら、年だから結婚をしろということには素直にうなずけない…。」(31歳)

「何となく、女性もそれなりにやりがいのある仕事を持てて、やりがいがあるなしに関係なく収入が得られるようになったじゃないですか。そうすると一人立ちできちゃうので、なんとなくそれで。」(30歳)

「もともと結婚することが人生の目的じゃなかったもので、そこで、会社が好きとか仕事が好きという、会社は別に好きでもないんですけども、いろいろ迷った挙げ句、このままになったという感じで。」(38歳)

また、家族から言われたから結婚する、ある年齢が来たから結婚する、結婚するのが当たり前だから結婚する、いうのには全く納得できず、自分で選択して結婚したい、という気持ちが強いことも伺える。

「確かに私も結婚したいですし、ずっと一生一人でいるつもりはないんですけど、ただ、やはり社会の概念というのにとらわれて、親が言うから結婚しようだの、40になるまでには結婚しなきゃいけないだの、というのでは結婚したくないですね。」(33歳)

「年だから結婚をしろということには素直に頷けないなという、そんなところです。」(31歳)

「動物は結婚するのは当たり前と言われて、私は動物じゃないのかと思うんですけども。」(33歳)

鶴岡の女性達は、結婚について、「個人の自由である」「していても幸せな人もいるし、しなくても幸せな人もいる」、との意見を持っており、自分自身は、いずれするだろう、と考えている。また、現在していない理由も特にあげていなかった。それは、22歳と27歳の2人以外は、すでに婚約者がいたり、結婚を考えている恋人がいるためであろう。

このように、インタビューに参加した女性達の大半は、「いずれは結婚あるいは生活を共にする人が欲しい」と考えている。結婚したくない、という気持ちは見られず、結婚を積極的に「回避」しているのではないことは明らかである。

一方、男性の方には、結婚への積極的な意欲は見られなかった。自分の将来を想像すると、たぶん「しているだろうな」程度のイメージしか持っていないようである。アンケートでは、婚約者がいる1名を含めた3名が「いずれ結婚するつもり」、2名が「一生結婚するつもりがない」、と回答した。前者の一人も、たとえ自分が結婚することになるとしても、自分の意思はあまり関係なく、成り行き任せにする、というような面がある。

「極端な話、ある日、ドアを開けたら、タクシードがあって、それをひょいと着せられて、「はい、結婚式ですよ」と言われても、そのまま、「ああ、そうですか」って行っちゃうような、そのくらいしかないんじゃないですかね。男にとっては。…いつかは、もしかしたら踏み込むかもしれないぐらいですね。ちょっと足を踏み外したら、そこへ行っちゃったとか。何かそんな気がしますね。」(男性)

B. 結婚になにを求めているのか

上記Aで見たように、特に女性は、結婚したいとの気持ちが強いようである。では、彼女たちは結婚に何を求めているのだろうか。また、どんな相手と、どのような関係を作りたいと思っているのだろうか。

まず、結婚したい理由について見てみると、一人暮らしかどうか、年齢や住んでいる地域に関わらず、ほとんどの女性がパートナーが欲しいことをあげている。中には、結婚関係に限らず、パートナーシップを求めている人もいる。

「…私、独り暮らしで、やっぱり寂しいなって思うんですよ。家族と離れているし、一人というのと家族がいるというのは、やっぱり人がいるのとは全然違うんですよ。だから、一生のパートナーが欲しいって思って、自分の家族、欲しいなって、すごい思いますね。」(25歳)

「一緒に生活する人というのはやっぱり欲しいなと思って。…今のところは別に相手は男性じゃなくても、すごい気の合う女の友だちとかでも、一緒に人生を共にできる人がいればいいなという程度にしか今は思っていない…」(25歳)

どのような関係を作りたいか、どのような相手が望ましいのか、については、パートナーシップ的な関係を作りたいので、そのために、話し合いができる人がいい、と考えている。

「仕事のこととか、普段の生活のこととか、相談した時にきちんと相談に乗ってくれる人が、まずいいと思います。仕事で疲れているからとか、俺にはその話はちょっと分からないとか、そうやってごまかされて話しにならないというのでは、それじゃあ一緒に暮らしている意味がないなど。やっぱり一番のパートナーであって欲しいから、そういう面で、まずは理解者というか、相談して適切なアドバイスをくれたり、お互いそこで話し合いができたとか、相手から「それは、こうでこうで、こうしなきゃだめだ」って言われるんじゃないかって、お互いに対等に話し合える、そういう関係ができればいいと思います。」(鶴岡 25 歳)

こう語る彼女は今つきあっている人と結婚するつもりでおり、彼はそういう人であるとのことである。その他の人も同様に、対等に話し合えるパートナーというイメージが明確に浮き彫りにされた。

「やっぱり結婚相手としたら、生涯のパートナーなので、前向きなというか、向上心のある人を私は尊敬しているので、そういう人がいいと思います。」(鶴岡 27 歳)

「…やっぱり聞く耳を持ってくれる人というか、耳を傾けてくれる人。自分もやっぱり傾けないといけないと思うんですけど。やっぱり…話ができる人がいいですね。」(鶴岡 23 歳)

「…結婚するのなら、結婚というか、一緒に暮らすパートナーという感じの考えなので、自分のことはもちろん自分でやるし、2人でやったほうがいいことは2人でやるしということイメージしているので、基本的には自分のことは何でもできる人というのを考えている…」(25 歳)

また、結婚する場合の条件としては、今のままの自分でいられることや今のままの生活(仕事など)が続けられることも重視されている。

「今のままの自分でいられる、結局、相手と自分の波長が合う人というのが一番ポイントになるのかなという気がします。」(30 歳)

実際に結婚が決まっている 25 歳女性の次の言葉は、女性の求める「自分が変わらないでいられる結婚像」を集約していると言えよう。

「…経済的というよりは、私は精神的な面で、お互いにとってお互いが安らげる場所じゃないと私は結婚できないって思ったんだけど、それができそうだなと思ったので、それが私が一番だったので、経済的とかそういうことではなくて、精神的な面を私は重視して決めたということですかね。」「私がやりたいことをやらせてくれて、あまり期待していないと言われてるので、何かしてとか、何かをやらなきゃいけないと言われていないので、そこが一番大きいと思うんですよ。結婚して仕事を辞めると言う人だったら、私は結婚しない。逆に、もうちょっと若い頃は、結婚しなくてもいいと思っていたぐらい仕事をしたいと思っていたので、それを認めてくれたから、じゃあ、結婚してもいいかなって、逆に言えば思ったんですよ。最初は結婚ということ自体、しようとも思っていなかったし、仕事ができれば、別に結婚をしなくても恋愛はできるから、それでも、子どもを産んじゃってもいいしとか思ったので、結婚にはとらわれていなかったんだけど、それが結婚してもできるんだなって分かったから結婚しようと思ったんですよ。そうじゃなかったら、たぶん結婚はしなくて、でも子どもはいると思うかなみたいな。私はそういうふうに思っていました。」(25 歳)

彼女の発言から、現在の自分の生活を続けられることが非常に大切であり、それができないのだったら、結婚しないと考えていることが伺える。

その他には、「意識の高い人」「ありのままの自分を受け入れてくれる人」、自分を大事

にしてくれる人、なども挙げられた。これらは、パートナーシップを築くためには大切なことでもあり、結局お互いに、非現実的な期待をせず、尊重し合いながら、対等な立場で向き合うような関係を望んでいると言えよう。

「意識の高い人ですね。結局、日本の社会は、男の人は別にそういうことをしなくていいって育てられていますよね、お母さんから。ですから、そういうものだと思っているわけですよ。結局、結婚したら全部女性がやらなきゃいけないというふうな、家庭に入るとみんな思っているんで、そういう意識で結婚、つまり、僕はもう疲れて仕事も忙しいから、そういう家政婦が欲しいから結婚したいという人、結構いると思うんですよ。いや、実際の話。「結婚したい」「なんで」と言うと、「いやあ、洗濯をやってくれる人が欲しいから」という、そういう意識の低い人も結構いっぱいいるんですよ、若い人の中にも。…日本人でそこまで意識の高い人というのは、よっぽど海外経験が長い人とか、向こうに住んでいれば別ですけど、純粹に日本で育てられた人というのは、ちょっと難しいんじゃないかなって、ちょっと思いますけれどもね。」(33歳)

「気楽に行きたいんです。で、「ああ、こんなこともできるの。すごいね」って言ってもらほうが理想なんです、私。本当に何もできない人間なので。自分に自信を持って何もできないので、期待しないで嫁に来てくれという人が理想ですね。あとは常識的な。そんな程度ですけど。」(27歳)

「…自分のことを大事に、自分と同じくらい相手のことも大事にしてくれる人だったら、別にいいです。」(鶴岡 22歳)

鶴岡のインタビューでは、従来女性が結婚相手を選ぶ場合に重視されてきた収入などについても、たずねてみたところ、次のような事が言われた。

「最低限の生活は保っていたい、というのが本音なのと、今のじぶんの生活レベルから落とすたくないというのが本音ですね。」(鶴岡 25歳)

「結婚して自分が仕事を持つかどうかは分からないんですけども、やっぱり結婚する相手としては、ある程度の収入、別に普通に無難にある人とか、やっぱり考えると思いますね…。」(鶴岡 27歳)

しかし、彼女たちが自発的に挙げる条件・関係性については、収入、というの挙がらなかったことから、他から言われてみれば、それも大事ではあるが、自分で結婚をイメージする場合、パートナーとして対等にやっていける人、というのが一番重要であることが明らかである。

このように、女性側は、自己実現の可能性、ふたりのパートナーとしての関係性、自分を失わずにすむこと、自分をそのまま受け入れてくれる人といったことを重視していることが伺える。

一方、男性の方は、あまり結婚あるいは結婚相手について具体的なイメージを持っていないようである。せいぜい「一緒にいて疲れない人」「収入があって気の合う人」という程度である。また、中には、女性が「最初から自分の結婚のコンセプトみたいなものを決めている」ことに反発を感じている人もいる。

「いつまでも恋人同士のような夫婦がいい」、あるいは、「仕事も持ちたい、何のかんのというふうに最初から自分の結婚のコンセプトみたいなものを決めて、この通りに実行されない人、